

栄ちゃんのカラオケ教室「名残りの桜」編

三年続いた男歌シリーズも一区切りで、久々の女歌。今回初めて麻こよみさんに

詩を書いて貰ったが、女流の感性に満ち溢れた

優美な歌に仕上がりました。早速ですがこの歌のテーマとその背景を説明します。日本の象徴と呼ばれる桜をモチーフに物語は展開する。舞台のシーンは春爛漫に咲き誇る桜並木の続く、とある公園で愛を囁き合う男女の影。街頭の明かりやそのあでやかに咲き乱れる花明かりに、揺れる女の心の内を大きくクローズアップして歌の導入部に入ります。そこには瑣末な世の中の動きや日常とは全く隔絶された愛に渴望する女の深い夢世界が展開します。既に二人の愛は、熱い情熱をぶつけ合うクライマックスの時期も過ぎ、女の心にはすきま風が吹き抜けるまま、今まさに引き潮に向かわんとする風情をイメージする。しかし積み重ねた愛をすぐに手放せる程単純に女の心は割り切れない。愛し合う充足感に満たされたままで居たいと、女はただただ一途に男を思う。

そんな女の心とはうらはらに又愛の行く手を遮るように桜の花びらは愛の思い出の一つ一つを消し去る様に散って行く。そんな桜吹雪が舞う中を、肩を並べて歩く足元が次第に遅れ始め、女の心には出会いの日からの楽しかった思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。

一瞬たりとも忘れた事の無い男の面影を追いながら、やがて女の胸にはその恋慕の情に改めて万感の思いが迫る。ふっと我に振り返り眼を上げて立ち止まると、男のその後ろ姿が寂しげに肩を落とし段々と遠くに消え去りそうで、女の胸の内には堪らない愛おしさが込み上げて男のもとに小走りて駆け寄る。

イントロの間にそんなシーンを自分の心のキャンバスに描きながら、イントロを良く聴きます。

前奏のスタート直後から琴のアルペジオが続きます。桜が無情にもはらはらと散る様を表しています。

その情景を受けてテナーサックスの太い音色が女の心に広がる目いっぱい嘆きと揺れを引き継ぎます。

名残りの～桜が～ リズムセクションがブレイクします(止まる)。この歌のタイトルになったようにこの作品の核に成る言葉が冒頭に出ます。冒頭に説明した様に桜が舞い散る風情を自分の心情に置き換えてそれを受け入れたく無い女の真情に思いを持って歌いだします。要するにその情景を打ち消したい訳ですね。女の心は。その情景を切り裂くかの様に、女が語りだします。

はら～はら～と～二回目のはら～の音程に気をつけて大きく小節を回します。

寄り添う肩に～は二人の一番幸せな時間ですね。優しく温かみを持って降りきる～に繋がります。

別れたくない～ここでこのお話の展開が変わります。女の本当の気持ちをココから歌い上げます。

別れた～はきっちりと言葉を突きます。そして次のく～でこの歌の持つスイング感を音楽的な乗りに合わせて自分で心地よい揺れを作ります。たと、くの間にとつとと言う小文字の破裂音を入れる事に依って強い表現が出来ます。

それを入れた後にく～の言葉尻をしゃくり上げる感じです。

そして無い～で大きくバイブレーションを駆けます。次のこのまま二人～に行く前に深いプレスを取り、

花にまぎれて逃れたい～のサビの部分まで気持ちを込めて、リズムに乗り遅れ無い様に一息に行きます。

誰にも干渉されずに自由に愛を語り合える世界に、又そう振舞える自分達の姿を夢見る様に伸びやかに歌い上げます。しかし、それも叶わず女の胸には落胆と諦めの感情が心に広がります。

明日があります～前の行とは全く逆の表現です。一つ一つの言葉をはっきりと語る様に。

冷めた感じてふと我に帰った感じです。あなたには～ここで再び寂しさが込み上げます。

そして歌の締めくくりの行は未練～花びら～払う指～。男に寄り添ってその背に持たれ甘えたい。

しかしそれも叶わず、誰かの元に向う男を送る女の悲しみと辛さを表す表現です。男の肩に降りかかる花びらと同時にその未練を暫し振り払うように。一方愛する男がこの場を離れて何処にも行って欲しくないと思う気持ちが女の心に入り乱れます。未練花びら～はリズムにきっちり乗って言葉のキレを良く、払う指～は大きく歌い上げる為に特にプレスを深く。概ねこんな箇所に注意を払い歌って頂ければと思います。

